

平成 18 年度 秋期 アプリケーションエンジニア 午後 出題趣旨

この出題趣旨は、独立行政法人 情報処理推進機構 情報処理技術者試験センターが公表しているものです。著作権は、同センターにありますので、その点ご注意ください。

問 1 〔出題趣旨〕

システム要件定義において、システム化の範囲や規模が、明らかに予定を超えてしまったり、技術的難易度が高すぎたり、システム化の効果が目標より小さかったりする課題が発生することがある。このような場合、アプリケーションエンジニアは、ユーザ及び開発サイド双方が納得できるシステム要件を設定するための提案を、ユーザに対して積極的に行うことが重要である。

本問は、システム要件の確定において、発生した課題をどのように認識し、その課題をどのように解決したかを具体的に論述することを求めている。

本問では、論述を通じて、アプリケーションエンジニアに必要なシステム要件定義の能力と経験を評価する。

講評

問 1（システム要件の確定について）は、多くの受験者がシステム要件の確定作業を経験しているからか、選択率が最も高かった。システム要件を確定するために、ユーザに対してどのようなアプローチを行い、どのような提案をしたかについて論述することを期待したが、題意と異なり、設計や実装での解決策についての論述が多かった。

-----*

問 2 〔出題趣旨〕

システムは、企業の業務遂行に重要な役割を担っているため、障害発生時の影響を最小限に抑えることが重要である。そのために、アプリケーションエンジニアは、起こり得る障害とその影響を想定した上で、その対策を業務アプリケーションの設計に組み入れなければならない。

設計に当たっては、例えば、障害発生時の速やかな問題判別、迅速な復旧、業務の部分的再開などが重要である。

本問は、システム設計において、業務アプリケーションの障害対策を実現するために設計した内容について、具体的に論述することを求めている。

本問では、論述を通じて、アプリケーションエンジニアに必要な障害発生時の影響を最小限に抑えるためのシステム設計に関する能力と経験を評価する。

講評

問 2（障害発生時の影響を最小限に抑えるためのシステム設計について）では、多くの受験者がシステムに対する障害対策を経験していることがうかがえた。しかし、設問で論述することを期待した業務アプリケーションの障害対策についての論述ではなく、システム基盤での対応や、運用対策に終始する論述が多かった。また、障害対策を列挙するだけで、設計における工夫については不十分な論述も多かった。

問 3 〔出題趣旨〕

基幹系システムのように、他システムとのインタフェースが多岐にわたり、移行データの種類や量が多い場合は、多くのシステム資源を必要としたり、作業時間が長くなったり、移行手順が複雑になったりする。このため、計画したタイムチャートどおりに移行できるかを事前に確認しておく必要がある。しかしながら、移行作業について、本番の移行時と同じ環境、同じ手順、同じタイムチャートで確認を行うことは、資源的、時間的制約から難しい場合がある。このため、タイムチャートのクリティカルな部分を見極め、移行作業が計画どおりに実施できることを事前に確認する方法を工夫することが求められる。

本問は、タイムチャートのクリティカルな部分について、どのように見極め、本番のシステム移行作業の実現可能性を事前にどのように確認したかについて具体的に論述することを求めている。

本問では、論述を通じて、アプリケーションエンジニアに必要なシステム移行計画の立案における分析・設計能力と経験を評価する。

講評

問 3（移行計画におけるタイムチャートの事前確認について）では、多くの受験者が移行計画策定や移行作業を経験していることがうかがえた。策定したタイムチャートにおけるクリティカルな部分の見極めと、その事前確認において工夫した点を論述することを期待したが、題意と異なり、移行データ量や作業時間の見積り、移行データ不備への対応策など、移行計画の内容に終始する論述が多かった。

注：この出題趣旨に関するメールでのご質問には、応じかねます。あしからずご了承ください。